

おんな だれ
女は誰でも愛する人のために装うのだろうか。
ちえ み
千枝を見ていると、圭吾の視線を意識している女
心がいじらしくうかがわれる。

じぶん しんじ
自分は信次の眼にどう映るか、を考えて、美
しく装おうとしたことなど、いったいあったら
うか、と露は思い返してみる。

むすめ ころ
娘の頃から今日まで一度も、化粧をしたこと
のない露であった。

まえ
「お前は、器量よしではないけれど……。人間は
そとがわ うちがわ
外側よりも内側やからな。お前の眼はいつもかし
こげに輝いとる。それが身上や。」

はは
母のフミはよくそう言った。
けしやう ひやうめん かざ
化粧をして表面を飾ろうとは思わなかった。

かあ
「お母さん、何を考えてらっしゃるの?。」
ちえ かがみ なか わら
千枝が、鏡の中から笑いを含んだ声をかけた。
かき われ かせ
露は、はっと我に返った。

「あら、……。」

なん つか
「何だか疲れてらっしゃるみたい……。あ、今日、
けいこ はや かせ
圭吾さん早く帰ってくるからって……。何の日か、
かあ し
お母さん知ってるでしょ……。」

ちえ
千枝がいたずらっぽく、ほほえんだ。

きやう ひ
「今日? 何の日だったかしら……。」

かあ
「だめですよ。そんなことじゃ……。お母さんの
たんじやうび
誕生日じゃありませんか。」

たんじやうび
「誕生日?。」

けいこ
「それでね。圭吾さん、うんとご馳走作れよ、で

よお
みなりを装うことにもさして関心がなかった。
ひま ほん よ
暇さえあれば、本を読んでいるという娘であつ
た。だが、そのことについて、特別、考えてみる
ということもついぞなかったのである。

いま ふき
けれども、今、露は、目の前の鏡の中に美し
く変わっていく千枝を見ながら、その上に、かつ
ての自分自身を重ね合わせていた。

おんな
かわいげのない、かしこぶっただけの女であつ
たかも知れない露の像は、千枝のそれとは、どう
してもびったりと重ならなかった。

おとこ ふんまん
信次の中に積もり積もってきた男の憤満が、
いま
今こそありありと見えてくるように思えた。

こうかい いた ともな
後悔が、はげしい痛みを伴って露を責めた。

かあ たんじやういわ
すって。お母さんの誕生日祝いというわけ。あ、も
うこんな時間。大へん、急がないと……。お母さん、
きやうこ ねが
杏子、お願いね。」

ちえ かがみ まえ かつ
千枝はそそくさと鏡の顔を片づけると、急ぎ
あし だいせろ ほう
足で台所の方へ消えた。

ながやまけ か き
露はとまどった。長山家へ嫁して来て以来、
たんじやうび いわ
誕生日を祝ってもらったことなど一度もなかつ
たのだ。だが、嬉しかった。

けいこ じぶん たんじやうび おほ
とりわけ、圭吾が自分の誕生日を覚えていて
くれたことが露の心はずませた。

ゆうがた はや きたく けいこ かこ かぞく
夕方、早めに帰宅した圭吾を囲んで、家族は
しよくたく
食卓についた。

ははうえさま しじゆうさい たんじやうび
「母上様、五十五歳の誕生日、おめでどうござい

ます」

わざとおどけた風な圭吾の言葉が終わると、

「乾杯、かんぱい…。」

三人のビールのコップが高々とかがげられた。

透明な秋の灯の下で、コップが、かちんと響いた。

杏子もわからないながら、にこにこ小さな赤い

コップを、同じようにさし上げる。

その仕草にみんなが笑いを誘われた。

「はい、どうぞ、花束をお受けとり下さい。」

圭吾が笑いながら、バラとかすみ草の花束を露

の胸に抱かせた。二人の拍手に幼い杏子の、可憐

な拍手の音がまじる。

「ありがとう。ありがとう。」

露は声をつまらせた。

生まれてきてよかった。生きていてよかった。

そして…。圭吾を育ててよかった。

秋灯がいくつにも重なってにじんだ。

その夜、露は珍しくビールに酔った。

露を見つめている一人の男がいる。

目をこらして見つめようとするが、焦点がう

まく合わない。

だが、そのとがった鼻梁、そげた頬……。信次

であった。

「あんた！信次さん！」

「露、祝盃に酔ったのか。かまわん。かまわん。」

今日はお前の誕生日や。嬉しい酒に酔うのは幸せなことじゃ。」

「信次さん！」

「よしよし。わしが介抱してやろう。こっちへおいで…。」

坐っている信次が、きものの袖を大きく左右に

広げた。

露は、信次のふところに、寄りかかった。大きな

胸が、あたたかかった。

幼子のように信次の腕の中で丸まりながら、露

は恍惚とした情感に身をまかせていた。

「信次さん……信……次……さん……。」

ぬるま湯のようなぬくもりの中で、身体が溶け

てしまいそうに快かった。

眠気がゆつくりと訪れ、露はいつの間にか、深い

い眠りの中に沈みこんで行った。

酔った露を抱きかかえてきて、寢室の布団の中

にそっと横たえたまま、圭吾は母親の寝顔にいつ

までも見入っていた。

年月というものは、常に同じ速さで過ぎていく。

しかし、苦しい日々は遅々として進まぬように感

じるし、幸せな時間は、瞬く間に通り過ぎてしま

うものだ。

苦悩の時間は永遠に続くかと思ひ、幸福の刻は

過ぎ去すつてしまおそうことを恐おそれる。そんな日々を繰くり返しかえつ、人々ひとびとは人生じんせいを生き、そして年としを取とつていくのであろう。

昭和五十六年の秋あきを、露ふきは、おだやかに迎むかえていた。

圭吾けいごと共に暮くらすようになってからの、二十八年間にじゅうはちねんかんは、露ふきにとつて須叟しゅそうの間であつた。

あの夏なつの日ひ、戦争せんそうに敗やぶれてからの日本にほんには、ともかくも、いくさのない年月ねんげつが三十六年間さんじゅうろくねんかん続つづいている。

戦争せんそう中の苦くるしみを忘わすれた人々ひとびとの上に、繁栄はんえいの傘かさが大おおきく広ひろがり、その中でぬくぬくと暮くらしているうちに、早はや、三十六年さんじゅうろくねんも過すぎ去さつてしまつた

のである。

露ふきも同じであつた。圭吾けいごや千枝ちえや杏子きょうこに囲かこまれた平穏へいおんな月日つきひは、露ふきをまるやかな風情ふぜいの媼おんなにかえた。

(あゝ、いつのまにか年を取とつてしまつた…)

露ふきはときどき、そんなことを思おもう。

小ちひさくくぐまつて、ちんまりと坐すわり、何なにを考かんがえるともなく、時ときを過すしていると、人生じんせいなんて、ちよつと瞬まはたきをする間あいだなのではないだろうか、などと思おもえてくる。

八十歳はちじゅうさいまで生いきてきた自分じぶんの人生じんせいが、ひどく短みじかく、あつけなく、思おもわれるのであつた。

圭吾けいごは労生部長ろうせいぶちょうになつていた。

俊敏しゅんびんな閃ひらめきと行こう動どう力りきよくをおおらかな人間性にんげんせい

で包つつみこんだ圭吾けいごは、上司じょうしにも部下ぶかにも信しん頼らいされる有能ゆうのうな人物じんぶつと評ひやうされていた。

そのかけには、千枝ちえの聡明そうめいさが大おおきく役立やくだつていた。千枝ちえは部下ぶかの家族かぞくの面倒めんどうなども、頼たのまれれば嫌いやな顔かおをせず引ひき受うけた。

若い職員わかいしよくいんたちは、「長山部長ながやまぶちょうの奥おくさん。」と慕したい、気きさくな千枝ちえに、相談そうだんごとを持ちこんだりした。

杏子きょうこは二年前にねんまえに、岡山おかやまの医師いしのもとへ嫁とついだ。長山ながやまの家いえは、杏子きょうこの子供こどもに姓せいを名乗なつてもらえればそれでいいという圭吾けいごの柔軟じゅうなんな考かんがえで、杏子きょうこは大学時代だいがくじだいからつき合あつていた同級生どうきゅうせいの恋人こいびとと

の結婚けっこんを実現じつげんさせることができた。

一人ひとりの男おとこの子こにも恵めぐまれた杏子きょうこは、父親ちちおやの圭吾けいごに対し頑迷がんめいさのないその結婚けっこん観かんを通して、ますます、敬愛けいあいの念ねんを深ふかめていった。

長山家ながやまけのありようも、信次しんじの時代じだいからみると、大おおきく変貌へんぼうを遂とげているのであつた。

「おばあちゃん、お茶ちやがはいりましたよ。」

千枝ちえが呼よんでいる。

露ふきは書きかけの日記帳にっきちやうを閉とじるとよつこらしよ、と立たち上あがった。おりふしに日記にっきをつけるのは昔むかしからの習慣しゅうかんだったが、最近さいきんでは、字じを書かくことも少しょう々億劫いっけつになつていた。

藍あゐしじらの単衣ひとえの腰こしに手てをあてがいながら、落ふき
はそろそろと廊下ろうかへ出た。

どこかで虫むしが鳴ないていた。お盆ぼんを過ぎると、
朝夕あさゆうはめっきり秋あきめいてくる。虫むしの声こゑを聞きくと、
落ふきは嬉うれしくなる。暑あつさももう終おわる、と、少すこしは
元げん気きがでてくる。年としを取とると、夏なつは凌しのぎにくくて、
どうにもやりきれない。

(以上4月21日放送分)